

第1体育館
8月28日
10:00

発28-102

幼児期男児の跳躍動作における身体関節および身体重心の動きの変容

○濱口 幸亮 (岐阜大学大学院)
香村 恵介 (京都文教短期大学)

春日 晃章 (岐阜大学)

本研究の目的は3歳から5歳までの跳躍動作を縦断的に解析し、身体関節および身体重心の動きの変容を明らかにすることであった。対象者は3歳時に立ち幅跳びテストをした男児105名の中から跳躍距離の上位5名(上位群)と下位5名(下位群)の計10名とした。撮影にはEX-F1(シャッタースピード1/1000秒、毎秒300コマ)を使用した。分析にはFrame-DIAS4(DKH社製)を用い、動作開始から離地までを解析した。各年齢間における身体関節および身体重心の関連の程度を検討するため、スピアマンの順位相関係数を用いた。解析の結果、3歳時と4歳時に股関節の最大伸展角速度、身体重心の水平速度および初速度に、4歳時と5歳時に膝関節の最大屈曲角度に、3歳時と5歳時に身体重心の初速度にそれぞれ有意に高い関連が認められた。群別に平均値をみると、上位群は年齢が増すに従い膝関節最大屈曲角度が増加傾向にあったが(3歳時 80.7 ± 6.8 deg、4歳時 88.9 ± 8.0 deg、5歳時 94.4 ± 9.7 deg)、下位群に同様の傾向はみられなかった(3歳時 98.9 ± 13.1 deg、4歳時 104.9 ± 32.3 deg、5歳時 94.3 ± 12.6 deg)。つまり上位群は3歳から5歳にかけて膝の沈み込みを浅くしていた。

第1体育館
8月28日
10:00

発28-103

幼児期における投動作の指導効果には性差が生じるのか？

第一報：遠投距離および正確性に関して

○春日 晃章 (岐阜大学)
杉原 かおり (岐阜大学大学院)

中野 貴博 (名古屋学院大学)
香村 恵介 (京都文教短期大学)

本プロジェクトは、幼児の投能力、捕球能力を短期間(1ヶ月間)に向上させることを主眼に作成した指導プログラムを実施し、その効果を多角的に検証することを目的としたものである。対象の年中4歳児(男児14名、女児16名)に対しては1回30分の指導を計8回(2回/週)実施した。本報では、遠投距離と正確性(高さ1m×直径1mの的に3m離れたところから10投した時の当たった数)に対する指導効果の性差について検討した。二要因(テスト間×性)分散分析の結果、遠投距離と正確性それぞれにおいて、テスト間に有意な主効果が認められ($P < 0.01$)、いずれもPre-testに比べてPost-test時の方が非常に優れた値を示したことから本プロジェクトにおける指導プログラムの有効性が確認された。一方で、遠投距離と正確性のいずれにおいても有意な性差は認められなかった。正確性における指導効果は男児の方がやや大きい傾向(男児:2.29回、女児:1.25回)を示したが、遠投距離ではほぼ同様の伸び量(男児:0.93m、女児:0.94m)を示した。以上の結果から、幼児期の投動作指導は、男女それぞれに遠投距離と正確性の側面から有益な効果をもたらすことが明らかとなった。

第1体育館
8月28日
10:00

発28-104

幼児期における投動作の指導効果には性差が生じるのか？

第二報：捕球能力およびボール遊びに対する嗜好に関して

○杉原 かおり (岐阜大学大学院)
中野 貴博 (名古屋学院大学)

春日 晃章 (岐阜大学)
香村 恵介 (京都文教短期大学)

本研究は、幼児期における投能力・捕球能力の向上を目指した指導プログラムの捕球能力およびボール遊びに対する嗜好の指導効果の性差に関して検証することを目的とした。指導プログラム内容および対象は第一報と同様であった。指導前と指導後に捕球テスト(10回中キャッチできた回数)および嗜好の調査を行った。嗜好においては、遊び内容7つ(乗り物、遊具、ボール遊び、積木、絵本、砂遊び、絵かき)を絵で表したカードを利用し、検者との対面形式で好きな遊び